南砺と加賀藩

金沢藩としても知られる加賀藩は、江戸時代（1603-1867）に置かれていた藩の一つで、富山県の東部と西部に位置するおおよその地域と、石川県の北部と南部に位置する地域を覆っていました。この時代、土地の価値は石高というシステムによって決められており、石高は米の量である石という単位で表されていました。前田家が治めていた加賀藩は、石高 100 万石以上と査定された米の年間生産量により、徳川幕府の中でも最大の藩と見なされていました。

城端、井波、井口、福光、福野、五箇山、利賀といった地域を含む現在の南砺として知られる富山県の西部地域はすべて加賀藩の領地であり、前田家によって治められていました。これらの地域の一部は、産業および職人工芸という点で加賀藩との間に強いつながりを持っていました。五箇山や福光で生産された生糸で作られた城端の高品質な絹織物は加賀藩の特産品で、現在の関西や東京などの地域で大きな需要がありました。五箇山地域は、高品質な和紙や秘密裏に生産された塩硝によって加賀藩に貢献しました。塩硝は、加賀藩の守りを強固にした火薬に欠かせない構成要素でした。また五箇山地域は、加賀藩において国外追放者が送られる流刑地としても機能していました。五箇山はその地形の険しさにより、出入りが非常に困難だったため、 国外追放となった犯罪者を送るのに理想的な場所でした。